| 2 通商擁護法の制定を中心とする通商政策関係  | 孫   |
|---|---|
| 3 米国経済復興政策と日米貿易問題   | 510   |
| 付 日蘭会商  | 544   |
| 八 英連邦諸国との通商問題   | 712   |
|   |   |
| 日英綿業交渉と英国の輸入  |   |
| 3<br>3<br>1 オ   | 03 77   |
| 1.1   | 31 80   |
| ナーで引頭   | 61 80   |
|   | 3 86  |
| 2 ブラジルにおける移民制限問題  | 873   |
| 3 日蘭仲裁裁判条約批准問題  | 926   |
| 4 ローマ法王庁との外交関係  | 936   |
| 5 仲裁裁判条約締結問題などをめぐるタイと   | 0の外交関係  |
| 日本外交文書(昭和1年时次长・国祭喝系)(日付索引日本外交文書)昭和1期1日第二部1第三巻                                   | 索引  |
| .▲  |   |
| <u> 小交政策一般</u>  | ラ同時ニ着實ニ指標シ反映シ居ルモノナリの。                                 |
| 1 昭和9年1月24日 (恒雄)大使、在米国武富(敏彦)臨時(1) 昭和9年1月24日 (恒雄)大使、在米国武富(敏彦)臨時(1) 広田(弘毅)外務大臣より) | 國外相<br>そ 交 ノ ノ<br>/ 第 演 ナ                             |
| 関する本邦各紙論調について   | ハ外相ノ述へタルカ如  |
| 付記 一月二十三日付  | 於テ全然防禦的自衞的ナリ此ノ點ハ特ニ我國民カ聲ヲ大ニ                            |
| 「第六十五囘帝國議會ニ於ケル廣田外務大臣  | 友邦諸國民ニ叫ハント欲スル所ニシテ同時ニ我國                                |
| 本省 1月4日後10時20分発   | 國民ノ注意ヲ促サント欲ス外相カ對露關係ニ付率直ニ「ソ」務算ノ婁宇ノミニ拉派ミよノ目的ラ語解シニニアバー音夕 |
|   | 近來ノ變調的態度ヲ指摘シ乍ラ然モ依然對露闢                                 |
| 外相議會演説ニ關スル本邦新聞論調(廿四日)   | 親善カ維持セラルルコトヲ希望セル點ハ「ソ」聯當局ノ熟                            |
| 各紙共外相ノ演説ニ贊意ヲ表シ要ハ今後ノ外交工作ニアリ  | 日ス可キ所ナル可シ   |
| 點ニ於テ大体一致セリ主要新聞論調左ノ通リ  | 日本カ直面スル外交不安ハ寛ハ國内ノ不安ナル                                 |
| , 也立、 万可: 傳奐 2 / < / / / アリー、 外相ノ常識的ニシテ地味ナル外交                                   | / 朴文方計トンテー悪生シタルモノニ外ナラ                                 |
| 此ノ常識的ニシテ地味ナル外交「コース」ヲ極メテ平凡乍スラ正常ノ丸位トプにニ車摂モシノニップリタ柑ノ済記ノ                            | シ然レトモ現實ノ根本問題ハ内閣ノアスノリアを見ていた。                           |
|   |   |

一 外交政策一般

ニ在リ 民大衆ヲ率ヰ其ノ抱懷スル平和政策ヲ具体化シ得ル ヤ否ヤ

郵送アリ 英宛ニ ハ ^度シ」ト附加ノコ 「露ヲ除ク在歐各大使ニ ト 轉電シ 在歐各公使 -

米宛ニハ「加奈陀、紐育、 Þ 轉電シ伯ヲシテ在南米各公使ニ郵送セシ 附加 ノコ ٢ 市俄古、 桑港ニ メラレ度シ」 郵送シ伯ニ

## 衍 記

第六十五囘帝國議會ニ於ケル廣田外務大臣演論

私ノ光榮トスル所デアリマス。 テ、 私 ハ 今日茲ニ帝國ノ對外關係ニ付所見ヲ開陳スルヲ得ルハ、 `` 昨年九月圖ラズモ外務ノ重責ヲ負フコト (昭和九年一月二十三日) ト爲リマ シ

х<sub>о</sub> ヲ以テ脫退ヲ通告スル 相違ガアリマシタ爲、帝國政府ハ、遂ニ昨年三月二十七日 ニ於ケル平和維持ノ根本義ニ付、 満州事變及滿洲國問題ニ關シ、 (※?) 此ノ重大ナル決定ヲ致シマシタ際、畏クモ ノ已ムヲ得ザルニ至ツタノデアリ 帝國ト國際聯盟ト 不幸ニシテ大ナル意見ノ Ċ, 天皇陛下 東亞 マ

> ニハ詔書ヲ煥發セラレ、 示遊サレタノデアリマス。 我帝國ノ 卽チ、 向フベキ進路ヲ明確ニ宣 2

傾注セントスルモノデアリマス。 外交手段ニ依リ我方針ノ貫徹ヲ圖ル」コト 外關係ノ處理ニ當リ右聖旨ヲ奉體シ、「世界平和ヲ念ト ズヤ世界ニ徹底スルニ至リ、帝國ノ前途ハ實ニ光輝ニ滿ツ 努力スルニ於キマシテハ、帝國ノ公明正大ナル態度ハ、必 我國民ニシテ今後益協力一致、以テ聖旨ニ副ヒ奉ルコトニ 夙夜朕カ念トスル所ナリ」ト仰セラレテ居ルノデアリマス。 確立ハ朕常ニ之ヲ冀求シテ止マス是ヲ以テ平和各般 基ナリト爲ス」ト宣ハセ給ヒ、更ニ「然リト雖國際平和ノ 「今次滿洲國ノ新興ニ當リ帝國ハ其ノ ルコトト確信スルノデアリマス。私ト致シマシテモ、 ニ是レ從フト雖固ヨリ東亞ニ偏シテ友邦ノ誼ヲ疎カニスル N モノニアラス愈信ヲ國際ニ篤クシ大義ヲ宇内ニ顯揚スル ハ向後亦協力シテ渝ルナシ今ヤ聯盟ト手ヲ分チ帝國ノ所信 發達ヲ促スヲ以テ東亞ノ禍根ヲ除キ世界ノ平和ヲ保 獨立ヲ尊重シ -ニ渾身!! 、努力ヲ 健 ノ企圖 我對 ッ 全 シ ハ 1 ナ

上ハ勿論、 幸ニ帝國ト 通商貿易上モ一層密接トナリ、 友好各國トノ關係ハ、 聯盟脱退後ニ於テモ外交 親善ヲ加 ヘッツ

任ヲ感ジ、 展 吾人ハ今後共聖旨ノ在ル所ヲ奉體シ、官民相携ヘテ同國發 現セラレ、新興獨立國トシテノ國礎モ愈固キヲ加フルノ運マシタノミナラズ、同國朝野ノ翹望スル帝政問題モ近ク實 マ ガ爲ニハ支那自體ノ安定ガ最肝要ナリト思考スルノデアリ 次 洋 ビニ至ラントスルコトハ、獨リ滿洲國ノ爲ノミナラズ、東 る ノ爲ニ極力寄與セネバナラヌ ニ帝國政府ハ、東亞ニ於ケル ノ平和延テ世界平和ノ爲、慶賀ニ堪ヘヌ次第デアリマス。 從テ、 且確固タル決意ヲ有スルモ 支那ガ速ニ其ノ治安ト繁榮トヲ囘復スル 平和ノ維持ニ付重大ナル ト考ヘテ居リマス。 ノデアリマスガ、之 へ 責

軍跳梁ノ狀況ニ付テハ、 治安ヲ亂スガ如キ事態ノ發現セザランコトヲ期待スル 穩ナル狀態ヲ維持シテ居リマスノハ、 現實ニ示シテ來マスナラバ、帝國トシテモ之ニ順應シ、充 日支關係打開ノ方針ヲ決定セルヤノ情報モアリマスガ、 支那政府ハ、其ノ從前執リ來レル抗日政策ノ非ナルヲ悟リ、 然ルニ、支那ノ政局ヲ見マスニ、未ダ斯ノ如キ希望ノ實現 コト 善隣互助ノ關係ヲ保チ、以テ東亞ノ平和及發達ニ貢獻スル デアリマス。又同時ニ、 付テハ特別ノ關心ヲ持ツモノデアリマシテ、苟モ同地方ノ 係竝ニ北支停戰協定維持ノ見地等ニ顧ミ、其ノ治安維持ニ アリマス。帝國政府トシテハ、滿洲國ト同地方トノ接壤關 ス。目下北支地方ハ政務整理委員會ノ統制ノ下ニ比較的平 分好意的態度ヲ以テ之ニ報ユルニ吝ナラザルモノデアリ デアリマス。若シ支那ニシテ帝國ノ眞意ヲ諒解シ、 日迄ノ處右情報ヲ裏書スベキ具體的事實ヲ認メ得ザル狀況 ニ遠ザカリ居リマスノハ誠ニ遺憾デアリマス。近來ニ至リ 帝國政府ノ衷心ヨリ希望スル所デアリマシテ、兩國カ へ 當然ノ使命ト云ハナケレバナラヌノデアリマス。 支那ニ於ケル共産黨ノ活動及共産 帝國政府トシテモ、 誠ニ喜バシキコトデ 深甚ナル 誠意ヲ 關心 モ 常 今 1 7 Ξ

政ノ確立及文教ノ進展等ニ付顯著ナル成績ヲ擧グルニ至リ 漸次其ノ緒ニ就キ、殊ニ治安ノ維持、産業交通ノ發展、 帝國ト緊密且特別ノ關係ニ在ル滿洲國ニ於キマシテ

六

Э 建

國以來英邁ナル溥儀執政閣下初メ、同國政府當局ノ倦ム

日滿議定書ノ精神ニ基ク帝國ノ全幅ノ援助

ト

ニ依リマシテ、 ナキ努力ト、

著々ト其ノ建設ノ步ヲ進メ、

諸般

ン施設

財

係ヲ有スル諸國ニ付テ、

最近ノ外交關係ヲ少シク述ベ 今私ハ其ノ内帝國ト

夕

イ

-隣接ノ

關

7

N

ハ

同慶ノ至デアリマス。

ト

思フノデアリマス。

ヲ以テ注意ヲ拂ウテ居ル次第デアリマ る。

4

接スル ン 帝國ト アリマス。特ニ滿洲國ノ成立後ニ於キマシテハ、直接境ヲ 關係ヲ持續シ、 於テハ根本的ニ相容レザルモノアルニ拘ラズ、常ニ善隣ノ 以前ト以後トヲ問ハズ、 國政府ノ「ソ」聯邦ニ對スル公正ナル態度ハ、 殊更事態ノ惡化ヲ吹聽シテ其ノ内治外交上ニ之ヲ利用スル 通信等ニ依リ内外ニ向ツテ我國ニ對スル非難 ルヤノ觀ガアリマスノミナラズ、「ソ」聯邦ハ頻リニ新聞 難問題ノ發生ヲ見ナカツタノデアリマス。然ルニ、近來 滿洲事變發生後モ相互ノ立場ヲ善ク諒解シマシテ、 北京基本條約ノ成立以來、兩國ハ正常ナル接觸ヲ續ケ來リ、 ノ感アル 邦側 常ニ之ガ爲努力ヲ續ケテ居ル次第デアリマス。 爲極メテ必要デアルトノ信念ニ基キマシテ、 聨邦ノ我國ニ對スル態度ニハ、若干ノ變調ヲ呈シタ É 「ソ」聯邦トノ國交關係ヲ顧ミマスニ、大正十四年 宣傳ニ拘ラズ、 ハ、誠ニ意外且遺憾トスル所デアリマス。 **滿、**「ソ」三國間ノ國交關係ノ調整ガ、 且平和手段ヲ以テ案件ノ解決ニ努メタ 終始一貫シテ居リ、 我日本軍ハ實際滿、 國體思想等ニ ノ聲ヲ放チ、 「ソ」 國境ニ 滿洲事變ノ 現ニ「ソ」 帝國政府 東亞平 由來帝 其ノ間 ノノデ

> 次ニ、帝國ト北米合衆國 鐵道讓渡ノ交渉ハ、不幸停頓ノ狀態トナツテ居ル 國ノ間ニ、 1 分諒得スルニ至ルベキヲ確信シテ居リマス。 リマシテ、「ソ」聯邦ニ於テモ必ズヤ遠カラズ我誠意ヲ充 ス 月以來北滿鐵道ノ讓渡交渉ニ付、 於テ何等新ナル軍事的施設ヲ爲シ居ラザル マスガ、 デアリマス。 N ノ趣旨ニ外ナラナイノデアリマス。 右交渉モ 仲介斡旋ノ勞ヲ執リ來ツタノモ亦右方針ヲ實行 遠カラズ再開 <u>٦</u> 1 關係ヲ觀察シマス ニ至ランコトヲ冀望ス 帝國政府ガ滿、 事態斯ノ如クデア い勿論、 而 シ =`` 「ソ」兩 ノデアリ テ、 本來兩 昨年六 北滿 N モ

生 ジ 솏 國ノ對日輿論ハ一時惡化シ、爲ニ兩國民間ニ感情ノ疎隔ヲ 關係ヲ希望スルモノデアリマシテ、進ンデ事ヲ構ヘントス 國間ニハ根本的ニ解決困難ナル問題ハ存在セズ ル モ、東亞ニ於ケル帝國ノ地位ヲ正當ニ諒得スルニ吝ナラザ N ノデアリマス。 ベキヲ信ズル次第デアリマス。 ガ如キコトナキハ勿論デアリマスガ、同時ニ米國ニ於テ 東亞百年ノ平和ヲ樹立セン タル ヤ ノ觀ヲ呈スル 抑帝國ハ米國ニ對シ、 ニ至リマシタガ、 ト 唯滿洲事變發生以來、 スルノ外何等他意ナキ次 常ニ衷心 古 Ξ リ帝國 ヨリ善隣 ト言ヒ得ル  $\overline{F}$ 米 シテ 1

濟上ノ動揺、 飜テ輓近世界ノ狀勢ヲ通觀致シマスニ、 思想上ノ混亂等ノ 爲、 國際關係ハ動モスレ 政治上ノ不安、 經 バ

デアリ

~マスカラ、

政府ハ

此

方面ニ於テ朝野相應ジ、

内外

5

相互ニ其ノ獨自ノ文化ヲ諒解セシムルコト

次第デアリマス。

他方國際間

1

理解ヲ進ムル為ニ

八 ッツ

各國 アル

ガ與テ力ア

, ル 譯

х<sub>о</sub> セズ、 又帝國 雙方全局ノ爲ニ慶賀スベキコトデアリマ 以テ更ニ兩國親交關係 英帝國ト 世界平和ノ爲ニ貢獻スル所以ト思ヒマス。此ノ意味ニ於テ、 世界各方面ニ於テ互ニ其ノ立場ヲ理解シ協力ヲ爲スコトハ、 N 英帝國ノ重要ナル 通商問題ノ交渉ガ大體ニ於テ結了 洋ノ東西ニ於テ類似ノ地理的位置ニ在ル兩帝國ガ、 ト英帝國ト ノ間ニ通商貿易ノ問題ニ付其ノ利害ノ調節ヲ計リ、 ノ傳統的親交關係ハ、今日ト雖何等動搖 一員タル印度トノ間ニ於テハ、 ノ増進ヲ期セン トスル ラ見マシ る。 モノデアリマ タコ 1 困難 ハ `

タ結果、

デアリマス。而シテ、近時我國ノ産業ハ著シク發達シマシ

對外貿易モ亦大ニ進展スルニ至リマシタガ、

諸外

國中ニハ一般的通商制限ノ傾向ト相俟テ、

我商品ノ海外進

出

三對

シ各種ノ障碍ヲ設クルモ

ノ續出スル形勢デ

アリ

マ

ス

力

う、

帝國政府ハ之ニ對シ鋭意機宜ノ對策ヲ講ジ

議モ、

遂ニ所期

ノ成果ヲ擧グルコトナクシテ休會シタ次第

傾向デアリマシテ、曩ニ開カレマシタ「ロンドン」 之ニ對スル障碍ハ何等緩和ノ跡ヲ示サズ、却テ增加スル

經濟會

1

モノデアリマス。然ルニ、

通商貿易ノ方面ニ於キマシテハ、

風ヲ改メ、互ニ信賴協力ノ念ヲ益高クスルニ在リト信ズル 難デハ無イ様ニ思ヒマス。要ハ各國カ無用ナル猜疑排他

ヲ距ツル二大隣邦ノ間ニ、名實共ニ太平ノ氣ヲ漂ハスニ至後相互ニ益諒解ヲ深メ、歷史的親善關係ヲ增進シ、太平洋 緩和セラルベキヲ確信シテ疑ハザル次第デアリマス。 以ヲ諒解スルニ於キマシテハ、日米間ノ感情ノ緊張ハ自ラ 亞ノ事態ヲ充分ニ認識シ、我國ガ東亞平和ノ安定力タル所 第 ランコトヲ龔望シテ已マヌノデアリマス。 彼我兩國ハ、其ノ通商貿易上ノ重要ナル關係ニモ鑑ミ、 デアリマスカラ、米國側ニ於テモ複雑ニシテ特異ナ 依テ N 今 東

テハ、

互ノ立場ヲ正解シ、以テ萬邦協和ノ大精神ヲ發揮スル

二於

1

如何ナル問題ニテモ其ノ解決ヲ計ルコト必ズシモ至

互信賴ノ念ガ稀薄ト爲ツタ樣ニ考ヘラレマスノ

トスル所デアリマス。

若シ各國互ニ其ノ誠意ヲ披瀝シテ相

平調ヲ失ハントス

ルノ感ガアリマシ

テ

世界各國民間

Ξ

ハ頗ル

遺憾

依リ 全然防禦的デアリ、自衞的デアル 之ヲ要スルニ、帝國ハ東亞ニ於ケル平和維持ノ唯一ノ礎ト 7 國ノ使命ニ基ク正當且合理的主張ヲ貫徹セントスルモノデ スルモノデアリマシテ、我國防ハ既ニ其ノ性質自體ニ於テ 防 モ此ノ意識ヲ離レテハナラヌノデアリマス。我外交モ亦國 シテ、其ノ全責任ヲ荷フモノデアリマスカラ、 ナラズ、前途寔ニ洋々タルモノアリト思フノデアリマ スナラバ、帝國ノ將來ニ付何等不安ヲ感ズルノ要ナキノミ 「嚮フ所正ヲ履ミ行フ所中ヲ執リ」、以テ事ニ當ツテ行キマ ザ シテ協力一致シ、如何ナル難局ニ逢著スルモ、少シモ動ゼ ニ於テモ、 以上説明申上ゲタル所ニ依リマシテモ、我對外關係 ノ遭遇スベキ事端多々アルモノデアリマスカラ、我國民ニ レマセヌ。 そ、 ŋ ルノ覺悟ト準備トヲ怠ラザルト同時ニ、冷靜ニ且著實ニ、 テモ明白ニ理解セラルベキハ、當然ノコトト信ズル マス。 固ヨリ帝國ノ有スル此ノ重大ナル地位及責任ヨリ發 我帝國ノ此 然シナガラ、凡ソ國勢ノ向上スル場合ニハ、其 將又將來ニ於テモ、 ノ自然且現實ノ地位ガ、 種々多事デアルコトハ否マ ト共ニ、我外交モ亦、帝 吾人ハ一日 世界各國ニ い現在 ス。 1

## The Address of Koki Hirota, Minister for Foreign Affairs, at the 65th Session of the Imperial Diet.

## January 23rd, 1934.

I was in September last unexpectedly appointed Minimister for Foreign Affairs. I have the honor today to speak on the foreign relations of Japan.

clearly and precisely Emperor graciously issued a Rescript, pointing out when the decisive principles of preserving peace in East Asia. At the time between Japan and the League, on the fundamental Manchoukuo showed that there was no agreement the 27th of March last year, because the Manchurian notice of withdrawal from the League of Nations on Incident and the questions regarding the State The Japanese Government step was the path taken His Majesty were obliged this nation б should serve the of

desire in the Extreme Orient, nor that it will isolate itself the world will surely come to realize the fairness and in accordance with the wishes of our August Sovereign convinced that if we all unite in our endeavours to act the justice of its cause throughout the world." thereby own, Our Empire does not mean that it will stand quitting the League and embarking no a course of its toward enterprises of peace shall sustain no change. an enduring peace thereby established." sources of evil in the Far Fast may be eradicated and henceforth pursue. It reads: "Now that Manchoukuo Empire and all the other Powers and to make known peace is what, as evermore, We desire, and Our attitude reads: encourage its healthy development, respect the independence of the new state has been founded, Our Empire deems it essential to " However, the to promote from the fraternity mutual confidence between advancement of nations. in order that the of international Further It and IS. H aloof Our Our am By б ij

> justice of Japan's position, and bright will be the future which are situated in our immediate neighbourhood to avail myself of this occasion to dwell somewhat on become even closer and more cordial than before. I between Japan and the friendly Powers in general have League the commercial, as well as diplomatic, relations Fortunately, today after our withdrawal from the diplomatic means in the interest of my energy to "carry out our national policy imperial message I am determined to use every ounce of of our Empire. Personally speaking, in obedience to the the recent phases of our relations with those countries world peace. wish by S,

Manchoukuo, thanks to the tireless labours of His Excellency the Regent, and of the government authorities, and also to the wholehearted assistance and collaboration extended to her by this country, true to the spirit of the Japan-Manchoukuo Protocol, has been making steady progress along all lines of her constructive work. In ordering the various governmental

new order, unremittingly mindful of the Imperial Rescript, to exert their efforts for the peace of the Orient and the peace of the world. I Manchoukuo as a young independent nation. This and which will has been achieved. Moreover, a decision is about to cation, in the consolidation of national finance, and institutions, especially in the maintenance of law and think it matter which has been made on the establishment of a monarchical regime, the advancement of education and culture signal success state in the development of industry of congratulation not for Manchoukuo alone but behooves our government and in assisting the healthy growth of go far so eagerly awaited by all her people, ð solidify the foundations people, always and communiis a the of þe ц.

The Japanese Government have serious responsibilities for the maintenance of peace in East Asia, and have a firm resolve in that regard. But what is most essential in the matter is the stablization of China

a spirit of good will. It is gratifying to note that North and Committee remains comparatively quiet. In view of the China under glad to reciprocate and meet her more than half way in Should China come to our notice to confirm the truth of the report. Japanese relations, persisting in China belies all such hopes. It has been reported that of peaceful development contribute through mutual aid and co-operation to the the she will be enabled to unite with Japan in performing herself. Our government sincerely hope for the political tangible signs of sincerity on her part, Japan would be to take steps looking toward the rectification of Sinolate the Chinese government, realizing the mistake of Unfortunately the actual situation of the present day obvious economic rehabilitation of China. They hope their anti-Japanese attitude, have decided mission of both Japan the appreciate but so far no concrete evidence has control of their our true motives of the part Peiping and of the China and Political globe. that give ę

8

order the that "Red Armies" in China. She expects China to see to it that nothing will happen ment the question of the maintenance of peace and watching not without grave misgivings the activities also from and of its important rights and interests of Japan in that region Communist Party and the increasing rampancy may bring chaos to that area. in North China is of special concern to Japan. the standpoint of the Tangku Truce Agreeterritorial contiguity with Manchoukuo and Meanwhile we are of of

after of ÷ Soviet Union toward Japan seems to have undergone a encountered. However, more recently the attitude of the respective positions so that no difficult question maintained between the two countries, and that even mutual understanding between the two Powers of their may be recalled that subsequently to the conclusion the Peking Regarding Japan's relations with the Soviet Union the Manchurian Incident there Basic Treaty in 1925 normal contact was a thorough was was

and tripartite relationship between Japan, Manchoukuo and and sought the solution of all questions by pacific means. their conviction that the proper adjustment of Japanese Especially since the establishment of Manchoukuo, the to keep on good neighborly terms with Soviet Russia divide the two countries, we have always ences in both theory and constitution of the state that Manchurian Incident. Despite the fundamental differserved her fair and equitable attitude toward the Soviet are calculated to serve. Japan has consistently prepolitical and diplomatic purposes which such rumours aggravations of this or that situation evidently for the against Japan, and circulate exaggerated stories about change of some sort. It is most surprising and regret-Union throughout these years past before and after the broadcasting at home and abroad through the table that the Soviet Union should take other channels unwarranted criticisms directed Government have been acting solely upon endeavoured ę press now the 9

must come to appreciate fully the true intentions of the transfer of the North Manchuria Railway. Such being the June to act as intermediary between Manchoukuo and friendly Soviet frontiers, Moscow propaganda notwithstanding. no new military establishments along the Manchoukuo-Indeed, it tranquillity of East Asia. Japan is setting up certainly case, I am sure that before long the Soviet Union Soviet Union in their negotiations on the proposed policy that Japan has undertaken since is only as part of the above-mentioned last

the Soviet Union was of paramount importance for the

10

at a standstill for some time past will soon be resumed. It may be definitely stated that between Japan and the United States of America there exists no question that is intrinsically difficult of solution. Far from having any thought of picking a quarrel with America, Japan fervently desires American friendship. At the

Japan. It is earnestly hoped that the North Manchuria Railway negotiations, which have unfortunately been

will Asia, name standing so as to keep the ocean forever true cultivating their historical friendship and good undercommercial and otherwise, continue Pacific will, sincerely hope that the two great nations across and realize Japan's rôle as a stabilizing force in enduring peace in East Asia. Therefore, if only America ulterior motive other than her desire necessary to reiterate that Japan is actuated by aroused against Japan, bringing about something like Manchurian Incident public opinion in America was not fail to appraise correctly Japan's position in same time, I am confident that the United States will between the two peoples is bound to disappear. temporary estrangement of the two people. It is Asia. Only for a time following the outbreak of the clearly whatever perceive the actual condition of the Orient in emotional view of their important tention may to join forces in to establish an yet relations, hardly linger ಕ East East the its no ----

are source of member of the British Empire, over knotty problems empires. That our negotiations with India, an important strengthen further the ties of friendship that bind our relating to questions of trade there may be, and to of the world. It is in this sense that our government stands and whole-hearted collaboration in all quarters through sympathetic appreciation of their respective can effectually positions, one in the East and the other in the West, remains unshaken even to these times. I believe the two commerce have now been substantially concluded seeking Powers, Japan's traditional amity with the British Empire gratification on both sides. to readjust whatever occupying serve the geographically cause of conflict of interests universal peace, similar ıs. key of р

Now a survey of the world as a whole reveals a sorry situation in which economic disorder, political unrest and confusion and conflict of ideas threaten to destroy international equilibrium at any moment, while

any earnest efforts to deal effectively with the situation. In of our export industries. economic achieved the desired results. Of late our industries Conference decreasing, However, international trade barriers, instead of rootless jealousy and antagonism and the reinforcement brotherhood. meet in a genuine and generous spirit of universal and, with a true comprehension of one another's position, insuperable difficulties need be anticipated in settling appears to have wilted not a little. I consider that no mutual begun to set up fresh obstacles against the advance of taken marked strides with a corresponding expansion our oversea trade, the sense of unity question if the nations manifest their sincerity confidence of nationalism, are fast multiplying. The World Economic was forced to adjourn What is wanted is the abandonment of one country after another has while, owing the nations Our government are making and mutual interdependence. to the in without having one another prevailing have 11

| シ右使命ヲ果ス爲英國ヨリ全幅ノ支持ヲ受クルコトヲ希望                                | 右ハ確ニ强メラルヘク又日米關係ニ關スル言及ハ囊ニ新大  |
|---|---|
| トヲ言外ニ要求シ全支那ノ安定ハ日本ノ國民的使命ナリト                                | 相ノ言ノ如ク東支鐵道ニ關スル露滿間ノ交渉カ進捗スレハ  |
| 的ノ見出ヲ附シ廣田大臣ハ全支那カ日本ノ勢力範圍ナルコ                                | 説中ニ於テ露國トノ良好ナル關係ノ維持ヲ希望シ居ル處外  |
| 子ニテ第一面ニ日本ハ全支那ニ對スル權利ヲ要求ストノ大々                               | 本ノ外交政策變化ノ緒トナルヘシ而シテ廣田外相ハ議會演  |
| モノナリト論シタリ之ニ對シ「ヘラルド」紙ハ例ノ如キ調                                | 聯盟脫退ノ主導者タル軍國主義ノ巨頭荒木將軍ノ辭職ハ日  |
| 葉ノ價値ヲ示スト同時ニ荒木將軍ノ辭職ヲ意義アラシムル                                | 論ヲ加ヘ居ル處其ノ要旨ヲ擧クレハ「タイムス」ハ日本ノ  |
| テ滿足ヲ與ヘントシ居ルモノノ如クナルカ實際行動コソ言                                | 而シテ「タイムス」等ハ荒木陸相ノ辭職問題ト結ヒ付ケ評  |
| 大視居ルハ當然ナリ當分日本ハ露國ニ向ツテ言葉ノ上ニ於                                | peace ト題シ二段割トナシ相當目立チ易ク要領ヲ載セタリ   |
| 於テ牛ノ如ク咆哮シ居レリ東京カ莫斯科ノ軍事的準備ヲ重                                | デアン」モ右同様ノ欄ニ Japanese Minister's appeal for  |
| 對シ鳩ノ如キ言ヲ爲シ居ル時「カガノヴイチ」ハ莫斯科ニ                                | Aims of Japan ト題シ一段二條ニ亘リ全文ヲ揭ケ又「ガー   |
| 居ル處日本ハ依然惡口ノ目標トセラレ居リ廣田氏カ議會ニ                                | タルカ「タイムス」ノミハ外國記事欄冒頭ニ Foreign  |
| 『ガアーデアン」ハ廣田外相ハ平和ニ對スル希望ヲ繰返シ                                | 貴大臣ノ議會演説ハ二十三日ノ朝刊各紙ニ要領掲載セラレ  |
| 。。。「「「「」」」、「」」、「」、「」、「」、「」、「」、「」、「」、「」、「」、「               | 第二〇號  |
| 起サシメタル處英國ハ日本ノ政治家カ同國ノ支配權ヲ眞ニ                                | 本 省 1月24日前着   |
| 他ノ軍事行動ハ日本ニ友好的ナル英國内ニスラ不安ノ念ヲ                                | ロンドン 1月23日後発  |
| ター」ニ感銘セシメラレサルモノナカルヘシ滿洲、上海其                                | 英国各紙報道振りについて  |
| 說拔粹ヲ讀ム英國人ニシテ其ノ「デフエンシブ <b>、</b> キヤラク                       | 広田外務大臣の第六十五回議会演説に関する  |
| 友誼關係保持ノ希望ヲ裏書キスルモノナリ之ト同時ニ右演                                | 田利 9 至 7 月 2 日  |
| 使ノ任命ニ依リ印象付ケラレタル日本ノ太平洋對岸國トノ                                | 2 召 19 年1 月 3 日 在英国松平大使より   |
|   | to fear, and her future will be full of hope. We should<br>not forget for a moment that Japan, serving as the<br>only corner-stone for the edifice of the peace of East |
|   | gonden mean, i am connident that eapan has nothing  |
| 。ころでは、「「「「」」、「」、「」、「」、「」、「」、「」、「」、「」、「」、「」、「」             | the path of rectitude, and in action always embrace the   |
| 合   | retain our composure and sobriety, and " stray not from   |
| 編注 本広田外務大臣第六十五回議会演説文は一月三十日                                | whatever difficulties may arise, and as long as we  |
|   | are united and well prepared to face courageously   |
| foregone conclusion.                                      | is always strewn with problems. As long as our people   |
| be rightly understood by other Powers is, I believe, a    | serious problems. However, the path of a rising nation  |
| which Japan naturally and actually finds herself, will    | are now, and will be in the future, beset with many   |
| our national mission. That eventually this position, in   | impossible for me to deny that our foreign relations  |
| save what is legitimate and rational and consonant with   | In the light of what I have already stated it is  |
| same time our diplomacy has no claims to put forth        | our nation with the outside world.  |
| nature for defensive and self-protective purposes. At the | institutions for facilitating the cultural intercourse of   |
| rooted. Our national defense is organized in its very     | take suitable measures in concert with private  |
| in which Japan's diplomacy and national defense are       | will between nations, our government are planning to  |
| this important position and these vast responsibilities   | national culture is of no small value in fostering good   |
| Asia, bears the entire burden of responsibilities. It is  | Since mutual understanding of one another's unique  |

12

一 外交政策一般

13

| シ居レリ云々ノ長文ノ記事ヲ揭ケ更ニ論説欄ニ於テ日本ノ                           | 第六八號   |
|--|--|
| 大帝國主義計畫ハ今ヤ明瞭トナレリ廣田氏                                  | 往電第六一號ニ關シ  |
| 演説ハ安定ナル口實ノ下ニ全支那ヲ其ノ支配下ニ收メント                           | 閣下ノ議會演説ニ對スル新聞論調二十四日朝刊ニ出揃ヒタ                             |
| スルモノナル處日本カ獨力ヲ以テ廣大ナル地域ノ政治的支                           | ル處其ノ對米關係ニ關スル部分ハ最モ注意ヲ惹キ大ニ協調                             |
| 配及經濟的開發ヲ行ハントスルコトカ世界ニ及ホス影響ハ                           | 的ナリトテ滿足ノ意ヲ表スルモノ多ク(「ハースト」系新聞                            |
| 茲ニ述フルノ要無シ日本ノ帝國主義ハ自滅ニ終ルヘク英國                           | モ同様ナリ)中ニハ演説ヲ荒木陸相ノ辭職又ハ好戰的雜誌                             |
| ハ斯ル計畫ニ協力ヲ與フルカ如キ事カ問題外ナルコトヲ東                           | 記事ニ對スル二荒伯ノ議會質問ニ結着ケ日本ニ「リベラル」                            |
| 京ニ知ラシメサルヘカラスト論シ居レリ                                   | ナ分子擡頭シ來レリト爲スモノアリ尙單ニ對米關係ノミナ                             |
| 米ニ轉電シ在歐各大使及壽府ニ郵送セリ                                   | ラス一般ニ平和政策ヲ述ヘラレタル穩健ナル語句ハ平素口                             |
| ~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~              | 喧シキ婦人團体又ハ平和團体ニ好感ヲ與ヘタルモノノ如ク                             |
| 3 昭和9年1月24日 広田外務大臣宛(電報)                              | 贊意ヲ表シタルモノアリ尤モ「ボルチモアー、サン 、 研現ニ二十三日朝當地ノ一婦人團体ヨリ代表者ヲ本官ニ送リ  |
| 広田外務大臣の第六十五回議会演説に関する                                 | ヘラルド、トリビユーン」等ノ有力新聞中ニハ幾分                                |
| 米国各紙論評について   | 疑的態度ヲ表シタルモノアルト同時ニ華府「スター」ノ如                             |
| 別 電 一月二十四日発在米国武富臨時代理大使より                             | カ<br>今   |
| 広田外務大臣宛第六九号  | ニ爲ス處ヲ見ル必要アリ俄ニ樂觀ヲ許サストノ見解政府部                             |
| 右各紙論評要旨  | 内ニアリト評シ居レリ主ナル新聞論評ノ要旨別電ス                                |
| ワシントン 1月24日後発  | 英、紐育、市俄古、桑港ニ轉電セリ                                       |
| 本 省 1月25日後着  | 英ヨリ蘭へ轉電シ在歐各大使へ轉報アリ度シ                                   |
|  |  |
| (別電)   | 甚タ意外且ツ遺憾ナリト言明シタリ莫斯科ノ連中ハ此ノ言平和的態度ニ酬ユル處無キヲ指摘シ其ノ最近ノ態度ヲ以テ   |
| 本 省 1月25日後着  | 又ハ威嚇ト見ルナランカ何レニ   |
| 第六九號   | ハ之ヲ以テ正シク日本カ希望スル極東平和ニ對スル脅威ト                             |
| 貴大臣議會演説ニ對スル當方面新聞ノ論評要旨左ノ通                             | 看做スナラン   |
| 紐育「タイムス」(二十四日)                                       | 紐育「ヘラルド、トリビユン」(二十四日)                                   |
| 過去二年間ノ日本當局ノ發言中ニハ世界ハ日本ヲ誤解スト                           | 廣田外相ノ外交方針ニ關スル言明中ニハ別ニ「センセイシ                             |
| ノ感シカ常ニ現ハレ居タルカ今囘ノ日本外相ノ演説中ニモ                           | ヨナル」ナ個所無シ世間ハ其ノ内ニ荒木陸相辭職ノ鍵ヲ發                             |
| 亦現ハレ居レリ諸外國ハ東亞ニ於ケル日本ノ利已的ナラサ<br>(@*)                   | 見セントシ仔細ニ點檢シ居ルニ相違無キ處右辭職ノ理由ニ                             |
| ル理想及目的ヲ觀取スルニ妙ニ吝ナルカ日本政府ハ大ニ平                           | ハ日本政府ハ同陸相ノ强硬政策ヲ卻ケ廣田外相ノ演説ヲ契                             |
| 和ノ爲盡シ居ル積リニテ今ヤ支露兩國ニ對シ福利ヲ分タン                           | 機ニ「リベラル」ナル政策ヲ採ラントセルモノナリト云フ                             |
| コトヲ提議ス廣田外相ノ言ニ依レハ日本ハ聯盟ヨリ脫退ヲ                           | 説ト同陸相ハ近來餘リニ妥協的トナレル爲强硬派タル少壯                             |
| 餘儀ナクセラレタルモ之カ爲却テ同國ト諸國トノ關係ハ密                           | 軍部ノ支持ヲ失ヒタルモノナリトノ説トアリ今日本外相ノ                             |
| これ アイ・シュー ション・ション・ション・ション・ション・ション・ション・ション・ション・ション・   | ※ 11 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1                 |
| 可寺ケ世界ケ日本ノ友形ニペテレ下山呆寺皆タレ也立ヲ里ヲ世界カ正解セサルニ憤憎ヲ禁シ得サルモノナルニ拘ラス | - 44:協周勺+レ氪アノ司外目、友、客、长、次州等各方分ニ發見スヘシ事實同外相ノ示セル政策ハ確乎タル艱アル |
| ルニ至ランコトヲ殊勝ニモ希望シ居レリ唯日                                 | ニ向ヒ日本カ亞細亞ニ於テ武力ニ依リ獲得セル地                                 |
| 態度ニ拘ラス支那カ之ニ酬ユル行動ヲ取ラサルヲ廣田外相                           | リ日本ノ為ノミナラス   |
| ハ遺憾トシタル後露國ニ對シ一段ト强キロ調ヲ以テ日本ノ                           | 諸國ノ爲ニモ利益ナリト述ヘタルカ演説中ノ「リベラル」                             |
|  |  |

14

載セル處「タイムス」カ新平和政策ヲ稱讚シ中華日報(汪 トスルニアル處中國問題ハ旣ニ國際問題トナリ日本ノ聯盟 兆銘機關紙)カ廣田外相演説ノ要領ハ滿洲國ニ對スル 、統治權强化及中國ヲシテ日本ノ中國支配ヲ承認セシ Ī 各國ハ益々軍備ノ擴張ニ腐心シ居レ メン 日本 IJ њ 17

本 省 1月26日後着

二十四日當地主要新聞

ハ閣下ノ議會演説全文(聯合電)ヲ揭

第五九號

中国各紙報道振りについて 海 1月26日後発

昭和9年1月26 広田外務大臣の第六十五回議会演説に関する H 広田外務大臣宛(電報)在中国有吉(明)公使よ

ŋ

4

及米國民ノ同國ニ對シ常時抱キ居ル善意ト好感ヲ喪失セ 經緯ハ今更何共致シ難シトスルモ若シ日本ニシテ米國政府 ハ唯將來ノ事實カ之ヲ證明スヘシ獨立國家滿洲國ニ關ス ニ至ルヘキコトヲ信スト述ヘタル ラント欲セハ今後荒木主義ヲ徹底的ニ淸算セサル カ其ノ果シテ然リヤ否 ヘカラス サ N ヤ

勢力タル 説ヲ爲シタリ同外相ハ其ノ中ニ早晩米露兩國ハ極東ノ安定 Ξ 對シ從來ノ友好關係維持ヲ希望セル 木陸相ノ辭職ト殆ント日ヲ同フシテ廣田外相ハ米露兩國 日本ノ 地位 ノ結局彼等ニ利益ナルコト 頗ル穩健ナル議會演 ヲ理解スル

脫退以來英米露

華<sup>44</sup> 府 「スター」(二十三日)

ニ大ナルモノアリ ニ影響サレタル結果ナルコト シ コト久シカリシニ今次廣田外相カ熾烈ナル親米感情ヲ表現 日本高官ノ口ヨリ鄭重ナル對米親善ノ意思表示ヲ聞 タルハ吾々ノ欣快トスル處ナリ而モ右カ米國ノ露國承認 Ξ 想到スルトキ吾人ノ喜 力 こ更 サ N

ルチモーア、 イヴニング、 サン」(二十三日)

與ヘタルモノニシテ吾人ハ之ニ對シ眞摯ナル氣持ヲ以テ歡 幾多ノ障碍橫ハリ兩國間ニ「本質的ニ解決困難ナル問題無 迎ノ意ヲ表スヘシ チユア」ハ日米間ニ恬淡且熱氣アル討議ヲ行フヘキ機會ヲ ハ 囘日本カ示シタル友好ト情誼ノ「ゼスチユア」ニ對シ米國 爲日米兩國民ハ萬難ヲ排シ荊棘ノ道ヲ進マサルヘカラス今 シ」トノ見解ニ必スシモ同意シ得サルモ平和ノ基礎發見ノ 此ノ精神ヲ以テ酬ヒサルヘカラス要スルニ日本ノ 「ゼス

ーボ 力 セ モ放埒ナ經濟的國家主義ノ一事例タル滿洲事件ニ付テハ日 家主義ヲ緩和セサルヘカラスト言ヘルカ然ラハ近代史上最 ヲ期待シ得サル次第ナルカ此ノ點ハ素ヨリ廣田外相モ列國 ン事ヲ希望スト雖モ現實ノ事態ヲ全ク無視シテハ到底多ク 爲ナル事之ナリ如何ニ日本ト其ノ隣國トカ一層理解シ合ハ モ 廣田外相ノ演説ハ凡ソ國家ノ實際爲ス處ト N ナ點ハ東亞ニ於ケル日本ノ覇權ヲ認メム事ヲ世界ニ促シタ 一獨立國民ノ行動ニ過キサル事、日本カ聯盟ヲ脫退シタ ント ーサル 、同僚ト大体意見ヲ同フシ通商上ノ障碍ヲ除去シ經濟的國 聯盟カ亞細亞ノ平和維持ニ關スル基本原則ヲ了解セサル 保持者ナル事、 實際ニ了解セムコトヲ(脫?)コトハ日本カ所謂極東安定 ハ同外相ハ總テノ國カ日本ノ立場ヲ了解セム事ヲ欲スル 致ニ直面スル一切ノ政治家ニ取リ模範的ノモノナラン例 點ニ存ス ノ判斷ヲ下シ得ル出來事トシテ外部ノ世界ハ之ヲ(脫?) ルチモア、 ヘカラスト為ス然シナカラ日本ノミ特別 スルモノ サン」(二十四日) ト **滿洲事件カ日本ノ支持ノ下ニ爲サレ** セハ僞善ナラン飜ツテ日本ノ國家主義ハ 其 ノ理 ノ立場ニ置 想 ト 9 ノ 不 N N

檢討ヲ要スル主要問題三アリ排日問題、

海軍軍縮問題及滿

洲問題之ナリ而シテ是等問題ニ關シ實際的了解ニ達スヘク

及衝突ノ原因ノ再檢討ヲ要望スルモノナリ惟フニ此ノ際再 難ナル問題無シ」ト此ノ言辭ハ日米兩國間ニ現存スル 歩ミ寄ラント日本ヨリ持掛ケ來ラントハ些カ吾人ノ思ヒ設

ケサリシ處ナリ廣田外相ハ言フ「日米間ニ本質的ニ解決困

誤解

過去二年間ニ於ケル日米關係ノ疎隔ヲ打破シ相互

一ノ了解へ

費府「パブリツク、

レツヂヤー」(二十四日)

事件ナリ

費府「レコード」(二十四日) 職トハ日本ノ外交方針轉換ノ契機ニシテ二荒伯ノ爲シタル 親米的態度ヲ表明セル廣田外相ノ議會演説ト荒木陸相 シ 常軌ヲ逸シ又其ノ上海、 議會質問ト共ニ日本自由主義ノ發言權恢復ヲ意味スル 意ヲ喚起スル方有效ナラン ノ忌ハシキ氣運ニ挑戰シ其ノ ニ鑑ミ此ノ際御互ニ罪ヲ鳴ラシ合フヨリハ敢然立ツテ現下 ハ又世界大多數ノ國ノ罹レル病氣ト軌ヲ一ニスルモノ テ平和ヲ維特スルノ望ヲ失ハシメタリト雖モ同國 滿洲 恐ルヘキ結果ニ對シ一段ノ注 ニ於ケル侵略行為 ハ列國共同 ノ病氣 重要 ナル ノ辭

16

一 外交政策一般

一 外交政策一般

19

| 演覧」                                     | スルニト龍ハサリキ薊聯ノヰ和政策ハ何等變更シタルコト                           |
|---|--|
| 「第六十六囘帝國議會ニ於ケル廣田外務大臣                    | / 化アリタルヲ描寫セントシタルモ實際ニ於テハ之ヲ                            |
|   | 策ヲ證スルモノナリ外相ハ蘇政府ノ政策ニ                                  |
| 各紙報道振りにつ                                | 於テ極東ノ平和ヲ保障セント努メ                                      |
| 広田外務大臣の第六十六回議会演説に関する                    | ニシテ實現スヘキカヲ明示セリ是等ノ事實ハ口頭ニ依ラス                           |
| 6 昭和9年11月30日 広田外務大臣宛(電報)                | セル蘇政府  |
|   | テ不侵略條約ノ是議ヲ爲シ日蘇滿國竟委員會削役及東支戴ルヲ得サリシハ故無キニ非ス然ルニ日本政府ニ對シ一貫シ |
| ~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~ | 閣  |
| カカル論理アリシヤ?                              | (欄機會ヲ有シ乍ラ平和的協調主義ヲ實現シ得ヘキ外交工作ノ                         |
| (欄外記入)                                  | 記相ノ演説ヲ以テ全然抽象的ニシテ平和政策ニ關シ陳述スル                          |
|   | 任ヲ蘇政府ニ轉嫁セント努メタルモノノ如シ大阪朝日カ外                           |
| ス                                       | 府ノ責任ヲ囘避セントシ且平和愛好ノ字句ヲ羅列シテ右責                           |
| ツアル侵略計畫ノ實現ヲ容認セサルコトニ在ラサルヘカラ              | ヲ説キ以テ釀成セラレタル日蘇關係ノ緊張ニ對スル日本政                           |
| 以テ日本軍閥及奪取的反蘇冒險者流カ蘇聯ニ對シ準備シツ              | ヲ滿足セシムル所更ニ尠ナカリキ外相ハ蘇聯ノ態度ノ變更                           |
| 爲執リタル方針ヲ維持スル前提ハ日本政府カ政策ヲ變更シ              | 際的地位ノ改善ヲ主眼トスル同演説ハ實際ノ平和維持論者                           |
| シ居ラサルヲ遺憾トス蘇政府カ日蘇關係ノ緊張ヲ一掃スル              | 分子ヲ滿足セシメサリシコトヲ證スルモノナルカ日本ノ國                           |
| 平和ノ實際的維持ヲ保障スルカ如ク變更シタルコトヲ明示              | 外相ノ演説カ「フアツシヨ」的軍閥ノ冒險政策ニ反對ナル                           |
| ナシ外相ノ演説モ陸相更迭ノ事實モ日本政府ノ外交政策カ              | 惹起シ右討論中ニハ峻烈ナル批評ノ聲ノ響アル事實ハ廣田                           |
|   |  |
| E                                       | 日本ノ國際關係改善ノ爲幾分積極的役割ヲ演シ得ヘカリシ                           |
| 日本ノ議會ニ於テスラ日本政府ノ外交政策カ激烈ナル討論              | ヲ附セリ   |
| 左ノ短評ヲ附セリ                                | 報トシテ閣下ノ議會演説ノ要旨ヲ揭ケタル後之ニ左ノ短評                           |
| ノ質問演説ノ要旨及首相海相陸相ノ應答振リヲ揭ケタル後              | 二十六日ノ「イズベスチヤ」ハ二十五日東京發「タス」電                           |
| テ貴族院ニ於ケル加藤衆議院ニ於ケル床次町田及安藤四氏              | 第四六號   |
| 又同日ノ「プラヴダ」ハ二十五日東京發「タス」電報トシ              | 本 省 1月27日後着  |
| トス                                      | モスクワ 1月26日後発   |
| 一掃ニ着手スルコトニ決シタルコトヲ示シ居ラサルヲ遺憾              | ソ連邦各紙論調について  |
| ラス事實ニ於テ斷乎トシテ軍部ノ讓成セル對蘇關係緊張ノ              | 広田外務大臣の第六十五回議会演説に関する                                 |
| ルヘシ乍然外相ノ演説モ陸相ノ更迭モ日本政府カ口頭ニ依              | 5. 昭和 9: 年 1 月 2 日 広田外務大臣宛 (電報)                      |
| 和政策ハ何等變更セラレタルコト無ク今後ト雖モ變更無カ              | 日<br>日<br>)<br>年<br>1<br>3<br>6<br>3                 |
| 持ヲ保障スル準備アルコトヲ稱セルカ右蘇聯ノ一貫セル平              | ~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~              |
| 滿國境委員會ノ創設及東支鐵道賣却等蘇聯ハ極東ノ平和維              | 北平、南京、滿へ轉電セリ   |
| 任ヲ囘避シ得サルヘキハ論ヲ俟タス不侵略條約ノ提議日蘇              | トノ主旨ヲ論セル外未タ論説ヲ揭ケタルモノ無シ                               |
| シタルモノノ如キモ外相ノ斷定ニ依リ自己及日本政府ノ責              | ノナリ  |
| テ極東時局ノ尖鋭化ニ對スル日本政府ノ責任ヲ輕減セント              | 意諒解ノ具体的證明ヲ求ムルハ原因ト結果トヲ顚倒スルモ                           |
| タル蘇側ノ態度ノ變化ニ依ルモノトナスカ如キ斷定ヲ下シ              | 略政策抛棄ノ具体的證明ヲ示サスシテ中國ニノミ日本ノ眞                           |
| 疑ハシ外相ハ蘇聯ニ對シテハ日蘇關係ノ緊張ハ近來行ハレ              | 題ノ解決無シ所謂善隣關係ノ囘復ニ關シ日本側ヨリ對支侵                           |
| 廣田外相ノ演説ハ此ノ目的ヲ達シタルモノト認メ得ヘキヤ              | 國ヨリ見レハ滿洲問題解決セスンハ中日問題延テハ國際問                           |

| 付テハ旣ニ意見ノ一致ヲ見ルニ至リマシテ、目下ノ所デハ | コトモアリマシタガ、其ノ間帝國政府ノ仲介斡旋ニ依リマ | タノデアリマス。然ルニ其ノ後更ニ幾度カ難闢ニ遭逢セル | シタガ、其ノ後三月頃ヨリ再ビ交渉ガ開始セラルルニ至ツ                           | 又北滿鐵道ノ讓渡交渉ハ本年初頃一時停頓ノ狀態ニ在リマ   | マシタコトハ、兩國國交ノ爲慶賀スベキコトデアリマス。   | マシテ、北洋漁業ノ如キモ本年ハ平穏裏ニ事業ヲ遂行シ得   | 御報告致シマシタ以來稍々良好ニ向ヒツツアル次第デアリ   | 帝國ト「ソ」聯邦トノ關係ニ付キマシテハ、前議會ニ於テ   | リマス。  |
|----------------------------|----------------------------|----------------------------|--|--|--|--|--|--|---|
|                            |                            | トモアリマシタガ、                  | コトモアリマシタガ、其ノ間帝國政府ノ仲介斡旋ニ依リマタノデアリマス。然ルニ其ノ後更ニ幾度カ難闢ニ遭逢セル | コトモアリマシタガ、其ノ間帝國政府ノ仲介斡旋ニ依リマタノデアリマス。然ルニ其ノ後更ニ幾度カ難闢ニ遭逢セルシタガ、其ノ後三月頃ヨリ再ビ交渉ガ開始セラルルニ至ツ | コトモアリマシタガ、其ノ間帝國政府ノ仲介斡旋ニ依リマタノデアリマス。然ルニ其ノ後更ニ幾度カ難關ニ遭逢セルシタガ、其ノ後三月頃ヨリ再ビ交渉ガ開始セラルルニ至ツ又北滿鐵道ノ讓渡交渉ハ本年初頃一時停頓ノ狀態ニ在リマ | コトモアリマシタガ、其ノ間帝國政府ノ仲介斡旋ニ依リマタノデアリマス。然ルニ其ノ後更ニ幾度カ難關ニ遭逢セルシタガ、其ノ後三月頃ヨリ再ビ交渉ガ開始セラルルニ至ツマ北滿鐵道ノ讓渡交渉ハ本年初頃一時停頓ノ狀態ニ在リママシタコトハ、兩國國交ノ爲慶賀スベキコトデアリマス。 | コトモアリマシタガ、其ノ間帝國政府ノ仲介斡旋ニ依リマタノデアリマス。然ルニ其ノ後更ニ幾度カ難闢ニ遭逢セルシタガ、其ノ後三月頃ヨリ再ビ交渉ガ開始セラルルニ至ツマシタコトハ、兩國國交ノ爲慶賀スベキコトデアリマス。マシテ、北洋漁業ノ如キモ本年ハ平穩裏ニ事業ヲ遂行シ得 | コトモアリマシタガ、其ノ間帝國政府ノ仲介斡旋ニ依リマシタガ、其ノ後三月頃ヨリ再ビ交渉ガ開始セラルルニ至ツ又北滿鐵道ノ讓渡交渉ハ本年初頃一時停頓ノ狀態ニ在リママシタコトハ、兩國國交ノ爲慶賀スベキコトデアリマス。御報告致シマシタ以來稍々良好ニ向ヒツツアル次第デアリ御報告致シマシタ以來稍々良好ニ向ヒツツアル次第デアリ | コトモアリマシタガ、其ノ間帝國政府ノ仲介斡旋ニ依リママシタガ、其ノ後三月頃ヨリ再ビ交渉ガ開始セラルルニ至ツマ北滿鐵道ノ讓渡交渉ハ本年初頃一時停頓ノ狀態ニ在リマ又北滿鐵道ノ讓渡交渉ハ本年初頃一時停頓ノ狀態ニ在リマス北滿鐵道ノ讓渡交渉ハ本年初頃一時停頓ノ狀態ニ在リマス。不シテ、北洋漁業ノ如キモ本年ハ平穩裏ニ事業ヲ遂行シ得部國ト「ソ」聯邦トノ關係ニ付キマシテハ、前議會ニ於テ |

ヲバ モ 奠マルニ至リマ 帝國ノ根本的關心事デアリマスガ、爾來同國ニ於テハ内外 聯盟脫退ノ當時煥發セラレマシタ詔書ニ於テ御垂示ノ通、 1 我盟邦滿洲國ガ獨立國トシテ健全ナル發達ヲ遂グルコ 諸政愈進ミ、本年三月ニハ帝政樹立セラレ、國基永遠ニ 加ヘマシタコ サレテ慶賀ノ意ヲ表セラレ、 天皇陛下ニハ本年五月秩父宮殿下ヲ滿洲國ニ御差遺遊 ト シタコト 八 吾人一 ハ、誠ニ慶祝ニ堪ヘマセヌ。 同ノ感激措 日滿兩國ノ關係愈緊密ノ度 ク能ハザル所デア ト 畏 ク 八

問題ニ付テ、 其 1 經過ヲ報告シタイト思ヒマス。

テ、 私ハ茲ニ前議會後ニ於ケル帝國外交上ノ重要ナルニ、 增 亞ニ於ケル地位ハ漸次列强ノ理解認識ヲ加フルニ至リ 其ノ後ニ於ケル我ガ對外關係ニ付概觀シ  $\overline{\hat{\nu}}$ ツツアルコト 歐米諸國及中華民國等トノ關係ハ、從ツテ漸次親善ヲ N, 私ノ至極欣幸ニ存スル所デアリマス。 マスニ、 帝國 三ノ マ ノ東 シ

引續キ當時開陳シタル方針ニ從ツテ、外交案件ノ處理ニ當 ツテ居ル次第デアリマス。 私 機會ヲ得マシタガ、其ノ後内閣ノ更迭後ニ於キマシテモ、 ハ前囘第六十五議會ニ於テ、 帝國ノ對外方針ヲ開陳スル (昭和九年十一月三十日)

第六十六囘帝國議會ニ於ケル廣田外務大臣演 說

何 記 英ニ轉電シ ・紐育ニ 郵送

表 疑惑ヲ招カ 華府條約ヲ廢棄セント ル セ 者ノ意見ヲ徴スヘキ IJ サル 様愼重ニ措置 スルハ不幸事ニシテ斯ノ如キ事柄 ノ時ナリト述 スヘキモ  $\sim$ 日本カ此ノ際早急ニ 1 ナリ 1 1 意見ヲ發 ハ

セ ŋ

軍政策ニ關シ何等新タニ說明スル所無ク倫敦會議ノ前途ニ 官邊ハ公ニ批評ヲ加フルヲ差控ヘタルモ右演説ハ タル事實ニ鑑ミ國内輿論ノ 來レリ同演説ハ日本大使館 閣下ノ演説ノ全文(紐育 モノト察セラル 1 ン」)又ハ要旨ヲ揭 廣田外相ノ議會演 と 11 月 30 12月1日後着 ハ大要左記 Π 日後発 革 が華府 イノ海 平和團體ハ造艦競爭防止運動ヲ開始セルモ「ヴイ 又海軍制限ノ破レタル場合默視セサルヘシ 演説ヲ觀テ日本ノ華府條約廢棄ノ決意ヲ確信ス 自由ヲ束縛スル凡ユル現存國際協定ヲ破棄スル既定方針 日本ハ滿洲攻略ニ依リ支那ノ領土保全ヲ保障スル九國條約 無侵略ノ方針確立ニ努メツツアリ」ト モ日本ニ對スル四割優勢保持ノ主張ハ斷シテ譲ラサル 第二段階ニ進ミツツアリ東洋ノ凡ユル平和機構ハ總括的ニ ヲ無效ナラシメ華府、 ŀ ル行動ノ自由ヲ有シタルニアラス シ又外相ハ「東洋ノ時局ハ改善サレツツアリ」ト謂フモ 倫敦二條約ノ廢棄ニ依リ其ノ行動 ヤ ト 爲シ「日本カ ノ點モ怪訝 ン 1 、言ナリ (無脅威

1 Ĩ

説ニ對スル反應トシテ深刻化シ

軍縮問題ニ關スル米國政策如何ノ論議ハ

如キ華府通信ヲ報道セリ

ケ

タルカ右ニ關シ「ヘラルド・トリビユ

「タイムス」及「ヘラルド

・トリビユー

三十日各新聞ハ 第五三四號

臨時議會ニ於ケル

本 ワ

省  $\boldsymbol{\mathcal{V}}$ 

シ

 $\boldsymbol{\nu}$ 

۲

20

統一ト共ニ米國内ノ宣傳ヲ目的 並ニ領事館ヨリ廣ク配布セラレ

ŀ

・セル

日本ニ依リ廢棄セラレタリト觀居り要スルニ米國當局ハ右 ヲ支持スヘキヲ確信スル旨言明セリ又「ホラー」上院議員 五隻建艦ノ一般的權限ヲ大統領ニ與フヘシト ハ條約廢棄ノ場合下院海軍委員會カ日本ノ三隻建艦ニ對シ 建艦競爭ハ窮極戰爭ヲ誘致スヘシ日英米三國カ其ノ内幕 ノ自己ノ提案 ルニ至レ Ŷ シ  $\sim$ ク N

ク現ニ日本ハ各國ノ非難ヲ無視シテ滿洲占領、上海攻撃ヲ對米五對一或ハ六對一ノ比率ニテモ充分自國ヲ防禦シ得ヘテハ右ハ華府條約ニテ既ニ實現セラレタル所ニシテ日本ハ

ハ ハ

共ニ破産ニ瀕シ乍ラモ戰爭ノ可能性ヲ見サル

限リ

う 殆ト全

難カラシメ守ルコトヲ容易ナラシム」ト

ノ外相ノ主張ニ付

新

「タナル

希望ヲ與フルモノニモ非スト觀察シ「攻ムル

海ヲ

敢行シタルモ他ノ海軍國ヨリ何等ノ

抵抗ヲモ受ケス完全ナ

狂氣沙汰ニシテ今ヤ實際ニ經費ヲ負擔シ

ク無益ナル軍備ニ巨額ノ

經費ヲ投セン

トシツツア

N

ハ全ク

實際戰爭ニ從事ス

## at the 66th Session of the Imperial Diet, The Address of Mr. Koki Hirota Minister for Foreign Affairs

針 滿ナル妥結ニ達シ、 重要案件デアリマシテ、 以上申上ゲマシタコトハ何レモ最近ニ於ケル帝國外交上ノ ヲ衷心ヨリ翹望シテ止マヌ次第デアリ ル 一般國際狀勢ノ安定ニ一層ノ貢獻ヲナサンコトヲ期シテ居 ゴノ遂行ニ ノデアリマスガ、 就キマシテハ、眞ニ擧國一致朝野各方面 目下内外ノ時局重大ノ折柄、 關係各國トノ和親ノ增加ニ資シ、 現ニ進行中ノ各案件ガ、何レ マ る。 我外交方 ノ協力 以テ モ圓

寄與スル所アランコトヲ希望シテ居ルノデアリマス。 方提案ニシテ克ク兩國ノ利益ニ合致シ、且其ノ實現可能ナ 致シマシテハ、 テ滿足ナル結末ヲ見ルニ至リ、日蘭兩國ノ親善關係增進ニ ント努メテ居ル次第デアリマシテ、本會商ガ近キ將來ニ於 ルモノデアル限リ十分之ヲ考慮シ、 ノ意見ノ合致スル所迄到ツテ居リマセヌ。併シ帝國政府ト メテ複雜且多岐ニ亘ツテ居ル關係上、今日迄未ダ十分雙方 終始公正安當ナル主張ヲ以テ之ニ臨ミ、 何等カ妥結ノ途ヲ求メ 先

先方代表部ト 本會商ガ開始セラルルニ至ツタノデアリマス。 政府ヨリ之ガ調節ノ爲、現行日蘭通商條約ノ補足的協定ヲ 況 終 シ 作 マ 、シテハ、 及日本ノ對蘭印輸出ノ激增ニ鑑ミマシテ、 リニ目下「バタヴィア」ニ於テ開催中ノ日蘭會商ニ付 ル 之ガ安結ニ努力シテ參リマシタガ、 コト ヲ目的トスル會商ノ開催方申出ガアリ 實ハ近年ニ於ケル和蘭本國及蘭領印度ノ貿易不 ノ間ニ既ニ約六ケ月ニ亘リ各種ノ問題ヲ討議 何分ニモ問題ガ極 本年一月和蘭 マシタノデ、 我代表部ハ +

濟マセ、雙方ノ批准ヲ經テ本年九月十四日ヨリ實施セラル キコトデアルト存ジマス。 N ルニ至リマシタ。 英兩政府間ニ於テ日印通商條約及附屬議定書ニ正式調印ヲ 表間ニ條約案ノ假調印ヲ行フコトトナリマシタ。其ノ後日 時澁滯スルニ至リマシタガ、漸ク四月十九日ニ至リ、兩代 ヨリ二、三重要ナル原則的問題提起セラレ、之ガ爲交渉一 質的意見ノ一致ヲ見マシタ處、 英領印度トノ通商交渉ハ本年一月、日印代表者間ニ大體實 ノ運用ハ誠ニ順調ニ行ハレ、大局ニ於テ日印貿易ハ滿足ナ 發展ヲ續ケツツアリマスコトハ、兩國ノ爲極メテ悅ブベ 爾來今日迄ノ實績ニ徴シマスレバ本條約 愈條文ノ作成ニ際シ印度側

迄ニハ尙多少ノ時日ヲ要スル次第デアリマスガ、成ル 等ノ事項ハ細目ノ點ニ亘ルモノガアリマスノデ、 開ノ交渉ニ於テハ、日英米ノ三國間ニ軍縮ノ實質問題 ニ於テハ右豫備交渉ノ開催ヲ適當ト認メマシテ之ニ同意ノ アリマシタノハ本年ノ五月十七日デアリマスガ、帝國政府 敦ニ於テ關係國間ニ個別的ニ豫備交渉ヲ行ヒタキ旨申出ガ 英米ノ三大海軍國ノ間ニ行ハレ、實質ニ於テ極メテ重要ナ 目下倫敦ニ於テ開催中ノ海軍軍縮豫備交渉ハ、主トシテ日 速ニ交渉ノ成立ヲ見ムコトヲ期待致シテ居リマス。 四ノ手續問題ガ未解決ノ狀態ニ在 (ノ手續問題ニ付意見ノ交換ガ行ハ 結局六月十八日以來倫敦ニ於テ關係國間ニ交 其ノ成行ハ帝國ノ注視ヲ怠ラザル所デア シテハ、帝國ハ我國防ノ安固ニ十分ナル ヨリ海軍軍縮會議ヲ容易ナラシムル爲、 不脅威不侵略ノ原則ヲ確立セ ノデアリマス。 大體最初ハ明年開催セラル N ノデアリマス。 ĸ 十月ヨ 其ノ解決 IJ べ 倫 兵 此 ム 關 再 IJ ク マス。 シテ、 他日更ニ申上ゲル機會ア 平和ガ更ニ確保増進セラレムコトヲ希望スルモノデアリマ 安當ナルヲ諒解シ、 條約ノ妥結ヲ見ルニ至ル樣努力ヲ續ケテ居ル次第デアリマ 右ノ方針ヲ體シ我主張ノ貫徹ヲ圖ルト共ニ、合理的ナル新 之ガ協定ニ當リマシテハ、右共通ノ限度ヲ成ルベク低下セ 成ルベク國民負擔ノ緩和ニ資セムトスルモノデアリマシテ、 關係國間ニ兵力量ノ共通最大限度ヲ設クベキコトヲ主張ス カラ、只今ノ所詳細ニ申上グル ス。尙豫備交渉ノ經過ハ公表セザルコトトナツテ居リマス カラシメムトスルノデアリマス。而シテ帝國代表ニ於テハ ハ之ヲ整備シ、以テ各國ヲシテ攻ムルニ難ク守ルニ不安ナ シムルト共ニ、 縮ノ精神ヲ發揮スル爲、 N 次ニ我對外通商關係ニ付キ ノモ此ノ趣旨ニ基クモノデアリマス。而シテ又帝國ハ軍 帝國ニ於テハ英米其ノ他關係國ニ於テ我主張ノ公正 攻撃的兵力ハ之ヲ極力縮減シ、防禦的兵力 新ナル軍縮協定ノ成立ニ依リ、 · ランコ 極力軍備ノ縮減ヲ計リ、 マ 2 ٢ テ主要ナル案件 コトハ出來マセヌガ、何 ヲ 期待シテ居 ノ經過 N 以テ將來 ノデアリ 世界的 ショ申 V

Ę

22

ノ保有ヲ期ス スルモノデアリ ルト共ニ、 マシテ、

帝國ガ從來ノ比率主義ヲ廢シ、

述ベマス。

右交渉ニ當リマ

スル交渉

ガ行ハレツツアル

べ

キ會議

渉ノ開始ヲ見ルニ至リマシタ。

旨ヲ通報シ、

マス。英國政府 ル交渉トシテ、

24

At the 65th Session of the Diet I had occasion to address you on the foreign policy of Japan. A new Cabinet has since been appointed, but I have continued to deal with our various external questions in accordance with the same policy as before.

I am very pleased to say that on the whole our relations with the various countries of Asia, Europe, and America have grown increasingly cordial because better understanding now prevails among the Powers regarding Japan's position in East Asia. Today it is my desire to report on a few important affairs that have engaged our attention since the adjournment of the previous session of the Diet.

The healthy development of our ally, Manchoukuo, is a matter in which we are vitally concerned as may be readily perceived from the Imperial Rescript issued on the occasion of Japan's secession from the League of Nations. We rejoice that the new State has since made

> ever. which has served to unite the Chichibu to Manchoukuo to convey His felicitations, Emperor gracious act on the part of His Imperial Majesty the last. We by the establishment of an Imperial Regime in March tration, and laid a lasting foundation for the country rapid strides in every branch of national adminisof despatching His Imperial Highness have all been profoundly two countries closer moved by Prince than the

cles were encountered time and again, an agreement of congratulation for the sake of Soviet-Japanese friendyear, were resumed in March. Although serious obsta-Manchuria ship. The negotiations for the transfer of proceed without any trouble this year is a matter our fishing industry in the northern waters was able to last report upon the subject. For instance, the fact that U.S.S.R., there has been some improvement since my As for Railway, temporarily suspended early this the relations between Japan the and North the for

views, thanks to the efforts of the Japanese Government, has now been reached on the price of transfer and most of other major points, leaving only a few technical questions yet to be solved. I expect an early conclusion of the transaction although it will still require some more time before a final settlement of the questions involving minor details can be reached. The Preliminary Naval Conversations at London

considering scheduled for next year. Ы be the are Government importance. conversations as they touch upon matters of paying close three great order to facilitate the work of the Naval Conference held at London among individual Powers concerned United at present being carried on naval Powers: Japan, Great Britain, such preliminary proposed that States. On May 17 attention to the The Japanese Government The Japanese Government, preliminary this year, conversations chiefly progress of conversations the British between extreme ಕ and the are the be

naval reduction and to lighten thereby the tax burden abolition of the ratio principle hitherto in force and the It is according to this principle that Japan proposes the sion and ment we desire to bring about a thorough and drastic concerned. establishment of a common upper limit for the Powers firmly the principle of non-menace her national defence, Japanese Government, while aiming at Japan's possesment have been going on between Japan, Great Britain, discussions on of procedure for among the Powers concerned regarding the questions matter opportune, accepted the British proposal. As the result, the resumption of the conversations in the conversations were opened on June 18. To put the the of a naval force fully adequate for the security of briefly, at the outset, views were exchanged United States. In consonance with the spirit of disarmathe substantial questions of disarmathe next year's conference, are endeavoring to establish Б these and nonaggression. negotiations and since October, the

The principal developments in the field of our

Ing and was agreement of views. The negotiations were then held up sentatives of both sides follows. In January this year, the Indo-Japanese Trade commercial relations with foreign countries are making satisfactory progress results so far obtained, and the Indo-Japanese trade operated smoothly, as has been shown by the actual force as from the 14th of September last. It is gratify-Convention and the additional Protocol, duly signed convention. It was on April 19 that a draft convention tion at the time of drafting the articles of the proposed character which were submitted by the Indian Delegafor a time because of a few questions of fundamental Conference б ratified by Japan and Great Britain, finally initialed. The Indo-Japanese both countries progressed to that arrived at β these instruments point where р Commercial substantial came the reprehave into as is

26

The Netherlands-Japanese Conference, now in session at Batavia, was opened through the invitation

such have E. call seem to be practical and to serve the common interests compromise However, our succeeded in arriving at a complete agreement of views. because of the complex and multifarious problems the above mentioned state of affairs. Netherlands-Japanese Commercial Treaty and to adjust agreement intended exports to the latter, proposed in January this year with the Netherlands Delegation upon various matters months lands East Indies and the marked increase of Japanese trade depression of their own land and of the Netherof the Netherlands Government, which, in view of the · and β proposals made by the Netherlands Delegation ę earnest endeavor conference be dealt past just attitude, by Government, maintaining consistently our Delegation have been deliberating taking into careful consideration all with, for the ę are seeking the way out to the Conference has not to come to an agreement. supplement the purpose of formulating For the six existing as that But, yet an as а q а

> of both countries. I hope that the Conference will come to a successful conclusion in the near future and contribute toward the promotion of the Netherlands-Japanese friendship.

out the world. general stabilization of international relations countries concerned that marks solved amicably to the enhancement earnest hope that all the pending questions will be important problems in Japan's foreign affairs. It is my I have now given an account of the latest and more the relations and to between the furtherance Japan of the cordiality and throughof the the

Empire. classes in the execution of let me ask for the confronting us both at home and abroad at Finally, In view cooperation of our of the the foreign momentous policy of our people of this time, problems all

29

公館に送付された。

7 昭和9年12月(1)日 広田外務大臣宛(電報)

広田外務大臣の第六十六回議会演説に関する

仏国各紙報道振りについて

本 省 12月1日前着 パ リ 発

特情 巴里第五一號

ノ如キハ全文ヲ揭載シタブル」ノ各紙以下多數新聞ガ演説内容ヲ詳報シ「タン」紙イニモ拘ラズ「マタン」、「エコ・ド・パリ」、「アミ・ドウー佛國各紙ハ廿九日ノ英國皇室御婚儀ノ記事ニヨリ紙面ガ少廣田外相ノ演説ハ廿九日夜ノ「ハバス」通信ニ發表サレタ

サレヌコトニ在ルコトヲ闡明シタ紙ハ廣田外相ガ海軍問題ニ於テ國防ノ本義ガ何人ニモ脅カ未ダ特ニ論説ヲ示スモノハナイガ「ジユルナル・デ・デバ」

ト報ジ、「フイガロ」紙ハ「不侵略不脅威ノ原則ノ勝利ニ

外相ノ報告ヲ歡迎シテヰル外相ノ報告ヲ歡迎シテヰル、ス「エキセルシオル」紙、「ウーブル」紙、「アクシオン、又「エキセルシオル」紙、「ウーブル」紙、「アクシオン、選進シヨウトスル日本政府ノ決意」ヲ特述シテ居ル

28

8 昭和9年12月1日 広田外務大臣宛(電報) 在独国杉下(裕次郎)臨時代理大使より

広田外務大臣の第六十六回議会演説などに関

するゾルゲの反日的通信記事について

本 省 12月2日前着ベルリン 12月1日後発

□ 第二三九號

ナシ外相ハ英米及露國トノ交渉カ有望ナルコトヲ述ヘタル本ノ外交政策上ノ地位ヲ淨化スル結果ヲ有シ能ハサリキトハ適正ニ要領ヲ報道シ各新聞之ヲ揭載シタル處只「ローカニ十日議會御演説ニ關シテハ當國半官通信及其ノ他ノ通信

ル見出ヲ付シタリツツ有リトノ報道ヲ爲シ同新聞ハ尖鋭化セル日支ノ緊張ナモ支那ニ關シテハ殊更默セリ日支間ニハ新タナル軋轢生シ

最

ハ尙一萬三千噸ノ建造權ヲ有スト述ヘタリ制限外ナリトナシタルモ外務省ハ之ヲ制限内ナリトシ日本日東京發電報ヲ以テ日本ノ通信社ハ航空母艦ノ新造ハ條約尙「ゾルゲ」ハ曩ニ往電第二二二號ノ通信ニ次テ客月廿二

然レトモ新式航空母艦ハ何レモ三萬噸ナルノミナラス日本

的

モノ鮮カラサ

Ň

ニ付同人ニ注意方御配慮アリ度

2

N

眞否ヲ吟味スル方法ナキヲ以テ責任ヲ負フ能ハストナシタ

カ「ゾ」ノ通信ハ當國ニ送ラルル米國筋通信ヨリモ反日

モ右ハ日本ニ存スル通信社ノ報道ニ根據シ當地ニ於テ其ノ

處同新聞社ハ本件通信ニ重大ナル誤アリタルハ遺憾ナル

通信ニ對シ貴電第一一六號ニ依リ同新聞ノ注意ヲ喚起シ

タ

前途悲觀セラレ居レリトノ通信ヲ爲シタリ依テ右「ゾ」ノ

初ノ提案ハ航空母艦ノ全廢ニアリタルヲ以テ倫敦會議ノ

N